ゆずきよ劇場

「僕らのじかん」

原作／樋口一葉
「たけくらべ」
絵・文／ゆずきよ

ある山の奥に 姿も毛色も違う
3匹の きょうだいが いました

1番年上で 大きい「シン」
ほっそりおねえちゃんの「ミト」
そしてまん丸おとうとの「セイ」

みなし児だった 3匹は
親の顔も己が何者なのかも
知りません

子供達だけで 力を合わせ
本当の きょうだいのように
仲良く 暮らしています

シンは 森へ行き カエルや虫を
ミトは 川で 魚を獲り
セイは 木の実や 果物を 集め
仲良く分け合って 食べ

眠る時も

「いつまでもこのままずっと 一緒にいようね」
シンが 言い
「ずっとずっと 変わらず 一緒に いようね」
ミトが言い
「ずっとずっとずーっと 一緒だよ!」
セイが言い

いつもぴったりくっつき合って
眠りに つくのです

3匹は
この 平凡で 変わらない 毎日が
ずっと 続くと 信じています

けれども3匹は 育ち盛り
心も からだも どんどん
成長して いきます

いつからか シンは
どんどん 女の子らしく なっていく ミトの姿を
しきりに 瞳で追いかけるように なっていました

「この
ドキドキして 頭がカーッと熱くなる感じは
いったいなんだろう?」

シンは 思い切って
セイに 打ち明けて みました

「シンは ミトに 恋 してるんだよ!
だって ボクと おんなじだもん!」

2匹は 顔をくっつき合わせて
笑いました

ミトには まだ 内緒です

しばらく経ったある日
シンが いつものように 食べ物を探しに 森へ行くと
カエルも 虫も どこにも いません
「困ったなぁ
おにいちゃんの 傘が 手ぶらで 帰る訳には いかないぞ」
勇気を出して いつもより 奥へ 進んでいくと
空が 急に 暗くなり 大粒の雨が 降ってきました
「うひゃあ！」
大きな木の ほこらを 見付けたシンは
一目散に 飛び込みました
すると 何かが 一緒に
飛び込んできた ではありませんか！

「俺も 一緒に あまやどり させてもらうぜ」
ビックリぎょうてん！
自分と 同じ姿をした 男の子が
目の前で しゃべっているのです！
「俺は 長吉ってんだ
立派な 大人のキツネになるために
親元を 離れ
自分の住みかを 探す 旅の途中 なんだ」
突然現れた 長吉に
驚きと 恐怖で シンは たまらず
雨の中へ 駆け出しました
「しばらくの間 ここに 居るから
いつでも 遊びに 来いよ！」
シンを 追いかけるように
雨音に 混じって 長吉の声が 聞こえました

シンは帰ってくるなりびしょ濡れのまま寝床に丸くなってしまいました
「シン？どうしたの？」
「カゼひいちゃうよ？」
ミトとセイが声をかけても届きません
“キツネ…大人のキツネ…”
“僕はキツネ!?”
シンの頭の中は長吉の声でいっぱいです
「きっと森でなにかあったのね
こういう時は放っておいてあげましょう」
ミトとセイは初めて2匹だけでゴハンを食べ
2匹だけでおやすみの言葉をかわし
シンにぴったりくっついて眠りにつきました

「昨日は ゴメン！
何も 獲れなくて
とっても はずかしくって ついー」

いつも通りの シンを みて
ミトと セイは ひと安心

「そうかー それじゃぁ 私
もっと 魚を 獲るように するわ！」
「ボクも 早く カエルや 虫を
獲れるように なるよう がんばるよ！」

2匹の やさしい 言葉に
昨日の 自分の 態度を
とても 反省した シンは
“長吉には 関わらないほうが いい”
強く 心に 感じました

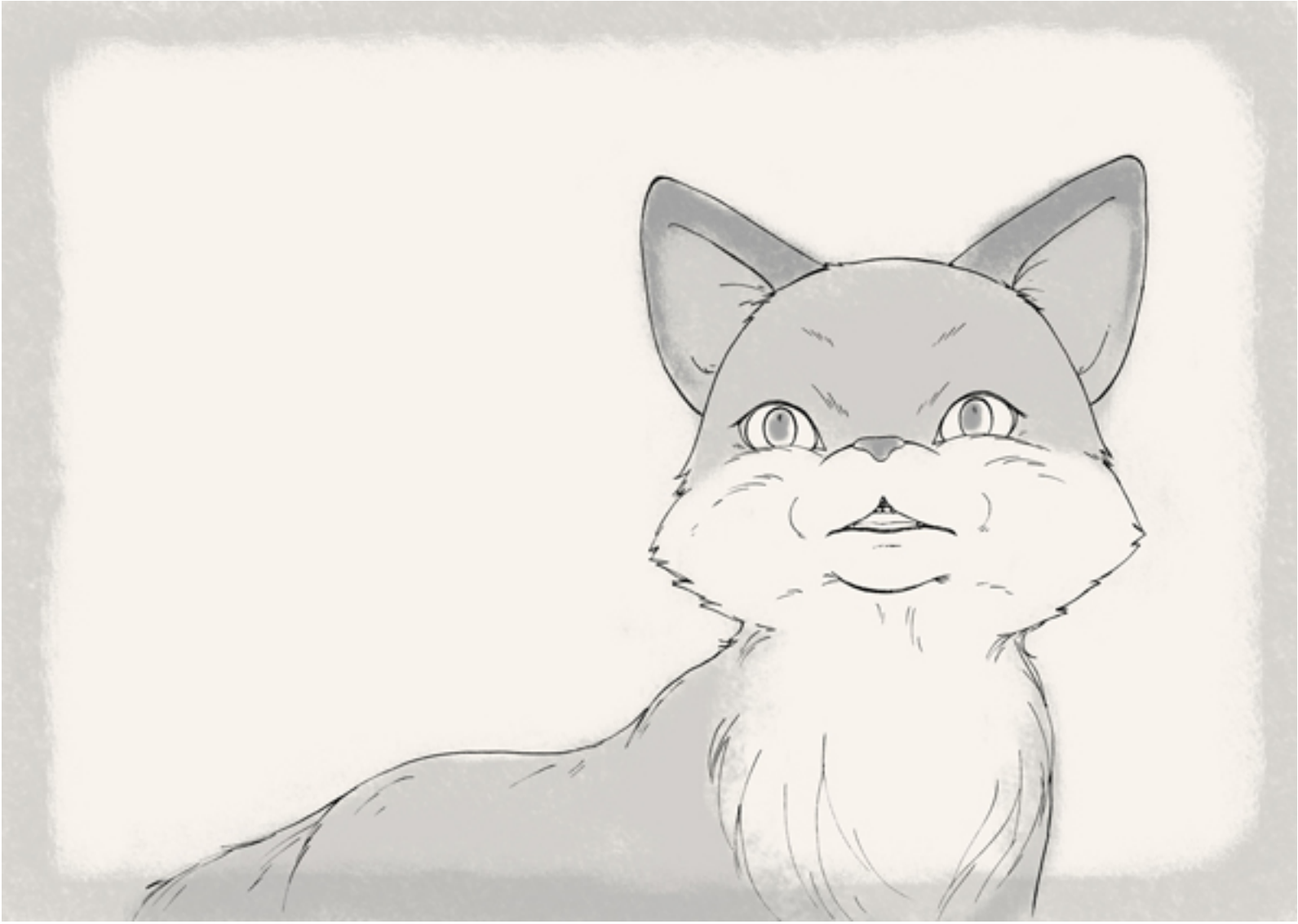
長吉に 出くわさぬよう
あの 大木から 離れた場所へ
狩りに向かおうとしていた シンの元に
「大変だ！ミトが大変なんだ!!
シン早く！早く!!」
セイが 泣きながら 走ってきました
慌ててミトの所へ 戻ると
なんと長吉が
ミトの 首に 噛み付いているでは
ありませんか！
「痛いっ 痛いよ
シン、セイ、助けて」
ミトの 首からは 血が 流れています

「ミトを 放せ！
ミトは 僕のいもうとだぞ!!」

シンの言葉に 薄笑いを 浮かべ
「いもうとだって？ 何バカな事 言ってやがる」
そこまで言うとやっと ミトを 放し
2匹が 駆け寄る 様子を 見て
シンに 向かって 続けました

「おまえ
本当に何も知らねえんだな？
俺達キツネにとっちゃ イタチは食い物なんだぜ？
ただのメシ！」

「メシ なんだよ!!」



「ミトは 食べ物じゃ ないもん！」

ショックで 言葉のない シンに 代わって
セイが 叫びました

「ヤレヤレ
イタチの いもうとの 次は タヌキの おとうとか…
まぁ いいさ
俺は このまま 森から 出てって やるよ

今 そいつが 助かった ところで
また 別の キツネに 見付かって
食われちまう だけだ…」

「ボクと シンが 守るもん！」

「仲良しきょうだいゴッコを やってられるのも
今のうちだぜ……
じゃぁな、アバヨ」

長吉は 3匹の前から 姿を 消しました

疲れ果て
ぐっすり 眠ってしまったミトが
朝方 ようやく 目を覚ますと
シンと セイの 姿が 見当たりません
慌てて 辺りを 探してみると
少し 離れた 丘の上で
セイが 小さく 泣いていました
ミトに 気付いた セイは
昨晩の シンの 言葉を
ミトに 伝えました

「僕は ミトも セイも 大好きだ
でも今日、長吉が
ミトをくわえてるのを見た時
僕はドキドキして
体中が熱くなるのを感じて
やっとわかったんだ
それは恋心 なんかじゃなくって
僕は・・・
僕は 自分でも 気付かぬ うちに
ミトの事を
獲物として 見ていたんだ と……
僕達は いつか 大人になる
今は 大丈夫でも
大人になった 僕は
ミトを 食べてしまうかもしれない
そんな 悲しい事は イヤだから
僕も 今すぐ
ここから 出て 行かなくちゃ いけないんだ」

「さよなら 僕の かわいい おとうと セイ」

「さよなら 僕の いとしい いもうと ミト…」

ミトとセイは
3匹で 仲良くしあわせだった日々が
2度と 戻ってこない事を 知り

いずれは 自分達も
離ればなれに なるであろう事を 予感して
泣きました

「どうして 私達は
何も 知らない 子供のままでは いられないんだろう？」

「大人になんか なりたくないのに
どうして ボク達は 大人になって しまうんだろう？」

大人になんか なりたくない

大人になんか なりたくないよぉ……

おしまい